

## 2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
人間健康学部	助教	松田凌
最終学歴	学位	専門分野
中京大学大学院心理学研究科博士後期課程	博士(心理学)	臨床心理学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

他者の幸せを願い、自己の幸せをかなえる人材の育成

##### 【目標】

社会問題の一つであるメンタルヘルスに係る諸問題の予防・解決に取り組める「真に信頼して事を任せうる人格」を有する人材を育成する。

##### 【方針】

心理学分野の多彩な知見を提供し、自律的に問題意識をもち考える機会を提供することで、社会や日常生活で起こり得る困難へ対処する力を身につけることをサポートする。

##### 【計画（方法）】

心理学分野の様々な授業を通して、メンタルヘルスに係る問題へ積極的に関心を向け、その解決を担えるよう人材の育成を行う。具体的には、講義を通じた正しい知識の提供と、実践を見据えた演習時間を両立させることで、知識・スキルともに身につけ社会に役立つ人材を輩出する。また学外実習を通じて、心理支援職の実践について体験的に学んでもらうことで、専門職として活躍できる人材を育成する。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

専門演習Ⅰ，専門演習Ⅲ，総合演習Ⅰ，教育相談（中・高），心理実習，臨床心理学概論，心理学概論，人間健康学

##### （後期）

専門演習Ⅱ，専門演習Ⅳ，総合演習Ⅱ，感情・人格心理学，心理的アセスメント，産業・組織心理学

#### ○教育方法の実践

講義系の授業では、毎回の小テストを課す、穴抜き資料を配布するなど、受講生が主体的に講義へ参加するような仕組みを取り入れた。また授業資料（PDF）を配布することで、講義内容の復習を容易にし、加えてレポート課題を課すことで欠席学生の平常点への配慮を努めた。各授業ごとの重要な語句をまとめた用紙（用語集）を毎回配布することで、重要語句を容易に把握できるよう工夫した。

#### ○作成した教科書・教材

特になし。

## ○自己評価

概ね計画通りに教育を提供することができた。講義系の授業では、用語集を取り入れた影響もあってか、期末テストの平均点が高まったことから、同様の工夫を続けていく予定である。一方で、前年度に比べ極端に受講者が減った科目があり、その授業運営に苦勞したため、受講者数に左右されにくいような授業計画・準備を進めることも重要であると感じた。

## II 研究活動

### ○研究課題

ロールシャッハ法及び描画法といった、心理臨床の実践で使用されているアセスメントツールの信頼性・妥当性を検証する。また各ツールの効果的なフィードバックの方法について検討する。

### ○目標・計画

#### 【目標】

上記の課題を目的とした研究報告を行う。大学生を対象とした基礎研究や、臨床現場で得たデータを用いた応用研究など、使用可能な環境は最大限活用しつつ、広範なアプローチから検討、報告を行えるよう尽力する。

#### 【計画】

ロールシャッハ法については、反応産出過程の認知心理学的理解を目指した研究を計画しており、研究資金が獲得できれば実施する。また医療機関と連携し、精神疾患を抱える方のロールシャッハ法、描画法のデータを共有してもらっているため、研究としてまとめ学会及び論文にて報告する予定である。

### ○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

#### （著書）

- ・松田凌（2023）「人さまざま」な私たちが抱える心理的課題とその支援 人間健康学 第17章 (p189-199)

#### （学術論文）

- ・松田凌・北村隼大（印刷中）統合失調症患者における WAIS-IV プロフィールの特徴と臨床的示唆 臨床精神医学
- ・松田凌・馬場史津（印刷中）描き慣れた「木」に表れるもの、現れないもの—「本当の自分」を知りたい教師の事例から— 臨床描画研究 41,
- ・松田凌（2025）小規模大学における合理的配慮の実践事例とその雑感 東邦学誌 54(1), 65-72 2025年7月
- ・Matsuda, R., Suzuki, C., Takamura, K., & Hatano, Y. (2025) Exploring Cognitive Processing and Neural Correlates in Rorschach Responses: A Reanalysis of Two Experimental Studies., Rorschachiana 46(2), 130-149
- ・明翫光宜・伊藤大幸・白石雅一・望月直人・小倉正義・高田晃治・松田凌・鈴木康之・鈴木勝昭・高柳伸哉・村山恭朗・山根康宏・水間宗幸・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・曾我部哲也・辻井正次（2024）救護施設入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査 臨床精神医学 53(8), 1031-1042
- ・松田凌・北村隼大・津端亮介（2024）もの忘れ外来受診者の認知的・心理的機能と介護負担 認知神経科学

- 明翫光宜・高柳伸哉・鈴木勝昭・鈴木康之・伊藤大幸・村山恭朗・山根康宏・小倉正義・水間宗幸・白石雅一・望月直人・水口勲・中島卓裕・浜田恵・中島俊思・野沢朋美・高田晃治・松田凌・曾我部哲也・辻井正次（2023）無料低額宿泊所入所者の心理学的・精神医学的特徴の実態調査臨床精神医学 52(10), 1235-1245
- 松田凌・安野奏（2023）衛生マスクと髭が顔の魅力に与える影響 東邦学誌 52(1), 9-17
- 馬場史津・松田凌（2022）描画テストの解釈過程—解釈の基礎と所見— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 21(1), 37-43
- 松田凌（2021）ロールシャッハ法に現れる注意制御の困難さ—不快刺激へ注意が向きやすい 1 事例からの検討— 中京大学臨床心理相談室紀要 21, 15-27
- 松田凌（2021）高 ASD 傾向者のロールシャッハ反応—視覚的注意の機能に着目して— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要 20(1), 43-54
- Matsuda, R. (2019) Multiple emotion regulation in Rorschach color responses: A study using IAT and self-report., Rorschachiana 40(2), 112-130
- 松田凌（2018）ロールシャッハ・テストの色彩反応と情動刺激によるストループ干渉の関連 ロールシャッハ法研究 22, 42-53
- 松田凌（2018）無気力を訴える高校生との面接過程に関する考察—心理検査の活用焦點を当てて— 中京大学臨床心理相談室紀要 18, 1-8

（学会発表）

- 松田凌（2025）ロールシャッハ法における複雑性と反応の質—ベイズ階層モデルを用いた検討— 日本ロールシャッハ学会第 29 回大会
- Matsuda, R. & Suzuki, C. (2024) Understanding Rorschach Responses through Facial Expression Tasks. The XXIV Congress of the International Society of the Rorschach and Projective Methods.
- 松田凌・北村隼大（2024）統合失調症患者に認められる WAIS-IV の特徴 第 29 回認知神経科学会学術集会
- 松田凌（2023）未来は“若手”の手の中？ 若手シンポジウム「投映法研究の予想図—これからの 100 年に向けた若手研究者の声—」日本ロールシャッハ学会第 27 回大会
- 松田凌（2023）高 ASD 傾向者のロールシャッハ反応—片口法と R-PAS の比較から— 日本ロールシャッハ学会第 27 回大会
- 松田凌・馬場史津（2022）描き慣れた「木」に現れるもの、表れないもの—「本当の自分」を知りたい教師の事例から— 日本描画テスト・描画療法学会 第 31 回大会
- Matsuda, R. (2021) The effect of negative attentional bias on the Rorschach response process. 2021 Virtual SPA Convention, Poster, Pre-recorded sessions,
- 松田凌（2020）再評価と抑制が反応産出に与える影響—情緒的な反応内容に着目して— 日本ロールシャッハ学会第 24 回大会
- 松田凌（2018）損傷反応（MOR）と情報処理バイアスとの関連 日本ロールシャッハ学会第 22 回大会

（特許）

特になし。

（その他）

特になし。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

特になし。

#### ○所属学会

日本心理臨床学会，日本ロールシャッハ学会，日本心理学会，  
Society for Personality Assessment，日本描画テスト・描画療法学会

#### ○自己評価

複数の論文を学会誌へ投稿することができた。また国内学会での発表において研究奨励賞をいただくことができたことから，最低限の成果は残せたように感じる。一方で，現在執筆中の論文が滞っているなど，予定通りに研究活動が進まないまま新年度を迎えてしまったことが非常に悔やまれる。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

##### 【目標】

保健学生相談センター運営委員，そして学部内の中退防止 WG の一員として，本学学生のメンタルヘルスの問題を予防し，健全で安心できる教育環境の提供に貢献する。また IR 委員会の活動を通して，本学の発展に寄与する。

##### 【計画】

学習・通学意欲の低下といった，本学学生の中退に影響する要因を客観的に把握し，効果的な中退防止策を策定できるよう検討する。

#### ○学内委員等

保健学生相談センター運営委員においては，自身の専門性を発揮しつつ，要支援学生のサポートに努めた。また学部内の中退防止 WG として，学部内における中退が懸念される学生の把握・情報共有を目的とした業務に努めた。IR 推進委員会では引き続き，他大学との共同 IR 研修会への参加や，学習ポートフォリオの活用・周知方法の協議などに携わった。

#### ○自己評価

保健学生相談センター運営委員には 2 年ぶりの復帰となったが，自身の専門性と親和性の高い役割を担っている委員会であることから，積極的に協議に参加できたように感じた。学部内の中退防止 WG においては，情報共有の方法を変更するなど，僅かではあるがシステムの改善に寄与できたと思う。IR 推進委員会では具体的な成果を残せなかったため，次年度以降は委員会に貢献できるように努めたい。

### Ⅳ 社会貢献

#### ○目標・計画

##### 【目標】

精神疾患への罹患をはじめ，メンタルヘルスの問題を抱える方が生きやすい社会の実現を目指す。

##### 【計画】

臨床心理学的支援に関する研究を報告することで，心理支援職あるいはメンタルヘルスの問題を抱える方に役立つ知見を提供する。また心理支援職として医療機関に勤務することで，精神疾患を患う方の直接的な心理支援の役割を担う。

#### ○学会活動等

日本ロールシャッハ学会では「若手の会」の設立に携わり、オンライン上での研究者間の交流の促進や、研究論文や文献の輪読会の企画・運営をサポートするなど、コミュニティ全体での活動を盛り上げるため尽力した。

#### ○地域連携・社会貢献等

精神科クリニックで心理支援職として職務を全うし、メンタルヘルスの問題を抱える人へ支援を提供した。また高校生向けの出張授業や、専門学校で非常勤講師として授業を行う際に、心理支援職の業務を具体的に紹介することで、国民の健康を支える専門職への関心を高めるよう努めた。

#### ○自己評価

所属学会で大学院生を中心とする若手研究者の活動をサポートする、高校生・学部生に向け心理専門職の魅力を発信するといった形で、臨床心理学という学問領域に寄与した。また医療現場に心理専門職の立場から携わることで、支援を要する人を援助し、加えてその経験を教育活動に活かすことができた。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自身の臨床技術を高めるため、そして修得した知識や技術を教育に還元するために、専門学会や研究会・研究会等へ積極的に参加する。また国際学会での発表を積極的に行なっていくため、英会話のトレーニングを継続する。精神科クリニックでの職務を通して、臨床データを収集しており、折を見て発表する。

#### VI 総括

教育面では、心理学の知見を基盤に主体的学習を促す授業設計を実践し、小テストや用語集の導入により学習理解の向上が認められた。演習や実習を通じて実践力の育成にも努め、メンタルヘルス課題に対応できる人材養成に寄与した。一方で受講者数の変動に伴う授業運営の課題も明らかとなり、今後の改善点として認識された。研究面では、ロールシャッハ法や描画法に関する論文投稿や学会発表を重ね、一定の成果を挙げたものの、研究進行の遅れという課題も残った。大学運営では、学生支援や中退防止に関わる委員会活動に積極的に関与し、情報共有体制の改善に貢献した。さらに社会貢献として、臨床現場での心理支援や学会活動、教育普及を通じて専門知の還元にも努めた。総じて、本年度は教育と臨床実践の往還を基盤に一定の成果を収めたが、研究の計画的遂行と組織的貢献の強化が今後の課題である。

以 上